

會學濟經學大國帝都京

# 叢論濟經

號三第 卷五十第

行發日一月九年一十正大

## 論叢

マルクス氏の集産主義の實行難を論ず  
 交通税の本質 . . . . . 法學博士 田島 錦治  
 階級に就いて . . . . . 法學博士 神戶 正雄  
 基督教文明の發展概論 . . . . . 文學博士 高田 保馬  
 社會哲學に於ける主意的二元論的思想 . . . . . 法學博士 財部 靜治  
 . . . . . 法學士 恒藤 恭

## 時論

財産税論 . . . . . 法學博士 小川郷太郎

## 資料

小作爭議原因の研究 . . . . . 法學博士 戸田 海市

## 雜錄

フアーガスの本能的社會觀 . . . . . 法學博士 河上 肇  
 我國の離婚率に就て . . . . . 經濟學士 岡崎 文規  
 定價制と正價制 . . . . . 法學博士 河田 嗣郎

## 定價制と正價制

河田 嗣 郎

近頃物價調節の必要が段々痛切に感ぜられて來て政府の調節策なるものも公にせられたが、抑も物價を根本的に調節しやうと欲するならば現時のやうに商品の生産と販賣とを全然私的企業の自由競争に委かせて置いては駄目である。どうしても一般的に正當にして確定せる價格を以て財貨の配給の行はれ得べき生産交易の組織を造り上ぐべく現状の改造を行ふことの避くべからざるものがある。

それに就けても私はギルド社會主義者の説く

所に傾聽すべきものあるを思はざるを得ない。試にペンチー氏の新著<sup>\*</sup>に就いて、氏が正當價格に關して述べて居る所を窺つて見ることにす。氏は現今のやうに生産も交易も投機一點張で行はれて居て、不正と貪慾と侵略主義とが政治と業務とを浸蝕してしまつては、今やたゞ之を遁るゝ道はたゞ昔時の正義と正直と公明なる取引との根本原則に復歸するより外に存せないと信じて居る。即ちよく唱へられるやうに、利潤の爲めに行はれる生産に代ふるに必要の爲めに行はれる生産を以てする外はないと信じて居る。而して此の根本原則に復歸せんが爲めの第一歩としては、先づ財貨の價格を一定し一般的に定價販賣の行はれる状態を造り出すを要する。尤も吾等の目的とすべき所は單純なる定價制でなくて、正當價格制たるや勿論だけれども、一足飛びに正價制には行き難いから先づ定價制を樹つべきものとする。此の第一歩が着けられたならば、本來定價制なるものはそれが同時に正價制でなくては社會からは認せらるべきも

のではないから、必ずや漸次に正價制に向つて進み行かねばならぬ。

現時の如き自由競争制の下に在つては、たとへ正價で以て販賣せられる商品があつても、それはたゞ困たるに過ぎないで他の多くの商品は正價以上多大の利潤を以て販賣せられる。然かも生産と商業とは此の利潤を目的として行はれるが故に、労働は主として此種の利潤多き商品の生産販賣の爲めに用ゐられることゝなる。然るに由來高價で利潤多き種類の商品は、大抵必需品以外のものたるを例とするが故に、現状の如き不統一價格制の下に在つては労働と精力とは眞實の生産よりも主として投機に向ひ行くことゝならざるを得ない。之れ現時の最大時弊である。所が或る人々は利潤を得る動機あればこそ能率は増加するものなれと信じて居るけれども、世の中に這んな謬見はない。たゞ労働に對する愛ばかりが此働を爲し得るに過ぎぬ。然るに經濟上の不安定ほど此の労働愛を殺滅するものはない。而して現今財物の品質の漸次粗惡となる

\* A. J. Penty, Guilds, Trade and Agriculture, London 1921, p. 46-63

は實に投機的經濟に伴ふ不安定の致す所たるに外ならぬ。

詳かに致ふるに元來正當價格の觀念は道德觀念であつて、中世時代に於ける状態は之を立證してゐる。即ち正當價格を以て品物を販賣するといふは、然かすれば多く賣れて多く儲かるが爲めではなく、人に與る所よりも人から多くを取るべきものでないといふ道德上の信念から行はれるものである。而して中世手工業組合の發達は此の正當價格を制度として造り上げ同時に之を定價制と爲し組合は極力其の制度の確乎たる實行と維持に努めた。然し正價及び定價制はたゞ單に道德觀念ばかりで以て維持さるべきものでなく同時に必ず財貨の品質が一定の標準を以て保證されたることを要する。此の保證は法令の力を以てしても行はれ得べきやうだけれども、結局それでは目的は達し難いのであつて、さうしても財貨の生産供給の任に當る人々の自治的な働によつて實現さるゝ外はない。即ち生産者自身が十分なる正義の精神を以て自己の仕事

に對する責任觀念を涵養し之に依て價格以下の粗悪品は決して造らぬといふ誇りと義務とを感ずるに依て甫めて其の保證は眞乎の保證たり得る。同時に又組合組織の働に依て先づ以て親方職人たる者の選定を嚴重にし、其の仕事の大きさを限定し又勞動時間をも限定し、粗製濫造の行はれ得べからざるやう仕事の分量を限ることも必要とせられるのである。而して中世手工業組合の親方達と組合自身とは實によく此働を爲し遂げたのである。さればこそ中世時代には正價的なる定價制を一般制度として見るを得た。然らば正價とは何ぞや。財貨の生産に用ゐられたる生産費に外ならないで、そは勞動の時間を以て測られるものである。

要するに此の正價的定價制の復活に依てのみ現時の經濟界の生産交易上に於ける大いなる弊害は除去され得るといふのが、ペンチー氏の主張である。私も亦其説の如くにして甫めてよく物價問題と併せて他の多くの問題の解決され得べきを信する者である。